



開館して10年 地道に役割を果たす

平成4年6月19日にオープンしてから10年が経ちました。我妻榮先生の遺徳を讃える施設としてばかりでは無く、先人を顕彰する事業の拠点として地道ながら、その役割を果たしてきました。開館と同時に就任された松野良寅館長は、「このへんで良かろう」とのことで引退を表明され、周田の留任を願う声も及ばず、後任に今田久夫氏を指名して6月19日の開館記念日に退任されました。10年間のご労苦に、一同心から感謝申し上げます。

第 4 号

発行日/2002年6月30日

発行/我妻榮記念館事務局

☎992-0045

米沢市中央3-4-38

TEL. 0238-24-2211

ふるさと讃歌

松野良寅

平成九年、我妻先生生誕百年記念実行委員会が主催して各種行事が行われて以来、早五年の歳月が流れ去った。

星にとって故郷金沢は、暗いイメージがまっわりついていたようである。

筆者は初代館長として『我妻榮——人と時代』の編集を担当したが、遺族の方々ははじめ各界各層にわたる方々の寄稿の文章や『追憶の我妻榮——嶮しく遠い道』をはじめ母校後輩に対する講演集、各種随想、新聞雑誌への寄稿等を読みながら、卓越した業績はいうに及ばず、学問にかけける情熱、濃やかな人情味、趣味豊かな日常、恩師赤井蓮次郎翁に対する敬慕親愛の言行、ふるさと米沢の味をこよなく愛しつづけた庶民性等々、筆者なりに「人間我妻榮像」が浮き彫りになった。寡黙でややもすれば無愛想な人士の多い米沢としては、まれに見る明るい、話術に長けたユーモアの心の持ち主であられた。

一方米沢の鉄砲屋町に生まれた我妻榮先生にとって、ふるさととは遠くにおいて郷愁にひたる所ではなく、折りあるごと訪ねては幼い頃の思い出をほりおこしては懐かしむ所であった。我妻先生は「ふるさと讃歌」を生涯絶唱しつづけた。その後半生はギブスと松葉杖で不自由な身を支えながら、文字通り「不撓不屈」の気丈な気概で乗り越え民法界のリーダー役を勤め上げられた。

我妻記念館のひなびた部屋で、岩倉まんじゅうで朝茶を飲みながら、火種塾の参会者たちと歓談のひと時を過ごし、厳父又次郎先生・母堂つる様らと一家団欒の日々を過ごされた、明治末年の旧鉄砲屋町の風情を偲んでみる。旧居宅のかもしれない雰囲気、当時の先生の面影とともに明治の人たちの逞しさを語りかけてくるような気がする。

室生犀星の抒情小曲の中に「ふるさは遠くにありておもうものそして悲しくうたうもの」という一節がある。犀

我妻榮先生講演追想

館長 今田久夫

就任の挨拶



過日、我妻榮記念館長就任の要請を受けた時、浅学菲才の身には任が重いと躊躇しました。

先生は「次の時代を担うもの」という演題で、新憲法と民法改正の精神について、さらに家族関係について具体的に明快に話されました。そして最後に「立法者の意向を実現するのは、あなた方だ。民法改正の是非はあなた方によって決まる。」といわれたことが深く脳裡に刻まれています。

我妻先生は世界的な民法学者であり、優れた人格者であることは承知しているものの、民法をはじめ法学には全く疎い者であること、また前館長松野良寅先生の卓越した業績を考え合せると大きな重圧を感じたからです。

次に、昭和四十一年九月十九日、米沢興譲館高等学校創立八十周年記念式典における『地方の高校生の責任』という講演も強く印象に残っています。

にもかかわらず、お引受けしたのは我妻先生に幾度か接し、かつ、ご講演を拝聴した者として、さらに教職在職中、多くの生徒に我妻先生のとなりや講演の内容を話した者として、いささかでも御恩に報いたいと考えたからです。

この中で、先生は米沢中学校卒業後、第一高等学校の入学試験を受けるまでの勉強の仕方と心境の機微について率直に話されました。

私が初めて我妻先生のご講演を拝聴したのは、教師になつて間もない昭和三十四年九月二十一日、米沢東高等学校の新体育館でした。

終りに「人間には大器晩成型と気の利いた化学肥料のような長続きしない型がある。田舎に育った者は堆肥でなければ、その責任を全うできない。息の長い人間になれ。」と論されました。

このご講演には特に感動したので、その後折にふれて生徒に話しました。もっとも、

どれほど生徒の内面にひびいたか、わかりませんが……先月末、『追想の我妻榮——峻しく遠い道』を再読して、我妻先生の民法学者としての卓越した業績と師弟・友人の

退任の挨拶

改めて先生のご決意に深甚の謝意を表する次第であります。興譲館中学・海軍兵学校・東北大学と同じコースをたどった先輩後輩という問柄を振り返ってみますと、その交友の軌跡は同郷・同窓という奇しき縁で結ばれていたとしみじみ痛感させられます。

我妻記念館は、一般通念で想像される今風な「記念館」ではありません。我妻博士関係の資料は多少保管展示してはいますが、いわば博士をはじめとする多くの米沢の先人

等には親密な人間関係を培われた人格を再認識し、一層敬愛の念を深くした次第です。最後に松野前館長・運営委員・管理人の皆様のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

私はその精神風土を後世に伝える仕事に大きな意義を感じ、これまで記念館の運営に微力を尽くして参りました。しかし「館長」という肩書きから一般市民が連想する地位のイメージからは程遠い、きわめて地味な忍耐力の要する仕事というほかありません。が、冷静に考えて見ますと、先人の時代と現在さらに将来とを結ぶ、大事な郷土愛の架け橋——大袈裟に言えば——郷土愛の継承者という歴史的な意義を併せ持った職責といえるかも知れません。この館長職は、毀誉褒貶を意識しては到底つとまらない、文字通り一隅を照らす黒子役と自覚して私はやってきました。

知見もさることながら、米沢伝統の律儀、謙譲の精神に徹し、広く郷土の精神風土の長短を熟知し、先人の足跡探究に好奇心を燃やし、同郷の人たちの滲つくし役を甘受さ

記念館長は「燈台守」

このたび我妻榮記念館館長就任のご快諾、まことに有り難く、関係者一同安堵と期待こもこもの感慨を覚え、前途に明るい兆しも見えてきました。

私はその精神風土を後世に伝える仕事に大きな意義を感じ、これまで記念館の運営に微力を尽くして参りました。しかし「館長」という肩書きから一般市民が連想する地位のイメージからは程遠い、きわめて地味な忍耐力の要する仕事というほかありません。が、冷静に考えて見ますと、先人の時代と現在さらに将来とを結ぶ、大事な郷土愛の架け橋——大袈裟に言えば——郷土愛の継承者という歴史的な意義を併せ持った職責といえるかも知れません。この館長職は、毀誉褒貶を意識しては到底つとまらない、文字通り一隅を照らす黒子役と自覚して私はやってきました。

我妻記念館は、一般通念で想像される今風な「記念館」ではありません。我妻博士関係の資料は多少保管展示してはいますが、いわば博士をはじめとする多くの米沢の先人

等には親密な人間関係を培われた人格を再認識し、一層敬愛の念を深くした次第です。最後に松野前館長・運営委員・管理人の皆様のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

私はその精神風土を後世に伝える仕事に大きな意義を感じ、これまで記念館の運営に微力を尽くして参りました。しかし「館長」という肩書きから一般市民が連想する地位のイメージからは程遠い、きわめて地味な忍耐力の要する仕事というほかありません。が、冷静に考えて見ますと、先人の時代と現在さらに将来とを結ぶ、大事な郷土愛の架け橋——大袈裟に言えば——郷土愛の継承者という歴史的な意義を併せ持った職責といえるかも知れません。この館長職は、毀誉褒貶を意識しては到底つとまらない、文字通り一隅を照らす黒子役と自覚して私はやってきました。

知見もさることながら、米沢伝統の律儀、謙譲の精神に徹し、広く郷土の精神風土の長短を熟知し、先人の足跡探究に好奇心を燃やし、同郷の人たちの滲つくし役を甘受さ

燈台守

私はその精神風土を後世に伝える仕事に大きな意義を感じ、これまで記念館の運営に微力を尽くして参りました。しかし「館長」という肩書きから一般市民が連想する地位のイメージからは程遠い、きわめて地味な忍耐力の要する仕事というほかありません。が、冷静に考えて見ますと、先人の時代と現在さらに将来とを結ぶ、大事な郷土愛の架け橋——大袈裟に言えば——郷土愛の継承者という歴史的な意義を併せ持った職責といえるかも知れません。この館長職は、毀誉褒貶を意識しては到底つとまらない、文字通り一隅を照らす黒子役と自覚して私はやってきました。

我妻記念館は、先人顕彰事業のそもそもの原点であり、また米沢有為会の蘇生の起爆剤となるのもこの記念館であると、私は確信しています。

平凡な事も一歩一歩積み重ねて行けば、やがて非凡な事績として結実する日が来ると信じて、我妻榮記念館の運営を進めてゆきたいものです。

記念館長は「燈台守」——ご奮闘を期待しております。

開館十周年の吉日(六月十九日)

今田久夫様

松野良寅

我妻榮先生略年譜

- 1897年 0歳 4月1日 米沢市鉄砲屋町（現我妻榮記念館）で父又次郎、母つるの長男として生まれる。
- 1903年 6歳 4月 興讓小学校入学
- 1909年 12歳 4月 米沢中学校入学
- 1914年 17歳 3月 米沢中学校卒業
- 9月 第一高等学校一部丙種首席合格
- 1917年 20歳 6月 第一高等学校卒業
- 7月 東京帝国大学法学部入学
- 1919年 22歳 1月 高等文官試験行政科合格
- 1920年 23歳 7月 東京帝大法学部法律学科独逸法兼修卒業
- 1922年 25歳 7月 東京帝大助教授
- 1923年 26歳 6月 文部省留学生として民法研究のため欧米留学
- 1925年 28歳 12月8日 帰国
- 1926年 29歳 鈴木緑と結婚
- 1930年 33歳 左足首の関節炎を思いギブス着用
- 1945年 48歳 東京帝大法学部学部長
- 1946年 49歳 貴族院議員、臨時法制調査会・司法法制審議会・家事審判制度調査委員会各委員
- 1948年 51歳 日本私法学会理事長
- 1956年 59歳 7月 法務省特別顧問
- 1957年 60歳 3月 東京帝大定年退官、同大学名誉教授
- 1964年 67歳 文化勲章、米沢市名誉市民
- 1966年 69歳 母校に私財を寄贈し「財団法人白頼奨学財団」を設立
- 1970年 73歳 母校興讓小学校に「まがき文庫」設立
- 1973年 76歳 9月 興讓館創立記念式典・我妻先生胸像除幕式・同窓会総会に出席
- 10月21日 急性胆のう炎のため死亡
- 勲一等旭日大綬章



昭和39年文化勲章に輝く、同年、米沢市名誉市民に推戴、67歳。山形県では伊東忠太（昭和18年）、斎藤茂吉（昭和26年）に続く、3人目の受章。



例年3泊4日ぐらいの予定で帰郷されるのが常でした。しかし、亡くなる1か月前は、1週間もの長き逗留となりました。そしてこの時、現記念館を訪れ、2階の勉強部屋の窓から、しげしげと周囲を眺めておられました。

夫ハ良人
妻ハ better half
夫物ハ 至上
Gemeinschaft
Sakae

第2部 我妻榮先生を偲ぶ集い

- | | | | |
|---------------|---|--------------|--------------|
| 1. 開 | 会 | と き | 6月30日 (午後5時) |
| 2. 館長あいさつ | | ところ | 上杉城史苑 |
| 3. あいさつ・偲ぶことば | | 会費制 | (5,000円) |
| | | | 当日も受付いたします |
| 4. 献 | 杯 | ——第1部 記念講演—— | |
| 5. 閉 | 会 | 同日 | 午後3時から「伝国の杜」 |
| | | 講師 | 松野良寅 前館長 |

〈出席者〉

相田英一	金田祐作	佐野清一	(株)日建設備
相田 實	神田倉一	庄司淳人	濱田五左衛門
青柳敬一郎	川野 希	白石和弘	平間 頼之
赤塚恭男	川野裕章	鈴木松子	平山 孫兵衛
浅野日和夫	菊池英徳	鈴木徳子	房間 正勝
安達治雄	北目二郎	須藤智子	船山 幸二
安部三十郎	木村敏雄	清野知義	本多 和彦
(有)荒井材木店	小泉 瑋英	曾根 伸良	巻 久寅
石田一郎	小嶋喜市郎	高野 実讓	松野 良寅
岩崎石材	小関 薫隆	高野 幸翁	水無瀬 正一
遠藤 綺一郎	小山 通厚	高橋 昌子	山口 了史
遠藤 拓魁	今田久夫	高橋 森務	山口 祥二
大井 魁	斎藤榮助	武田 芳夫	米野 一雄
大滝板金工業所	斎藤 昭二	多田 昌伸	米野 きぬ子
大木 文夫	(株)佐藤建材店	塚田 和子	渡部 文雄
大久保利之	佐藤 政一	堤内 藤文	
尾崎 茂一	佐藤 英男		
(株)カトペン			

〈6月28日現在・敬称略・五十音順〉

我妻榮記念館出版図書

- 1、我妻榮先生講演集 一、〇〇〇円
- 2、ふるさと人物探訪
―親と子の郷土史― 一、〇〇〇円
- 3、我妻榮先生 二〇〇円
- 4、伊東忠太先生 二〇〇円
- 5、高橋里美先生 二〇〇円
- 6、素顔の先人たち 一、五〇〇円
- 7、海軍王国の誕生 一、八〇〇円
- 8、我妻 榮一人と時代―
我妻榮先生生誕百年記念誌 四、〇〇〇円
- 9、自雷子物語 五〇〇円
- 10、春宵よもやま話
郷土史の散歩道 五〇〇円
- 11、ふるさと明治の曙 五〇〇円
- 12、古稀の細道 五〇〇円
- 13、先人、大いに語る 一、〇〇〇円

我妻榮記念館の開館日

毎週火・木・金曜日

午前10時～午後4時

(但し、冬期間は変更あり)

TEL 〇三八―二四―三三―